

# 不登校児への対処 X

## —複合的アプローチ—

寺田 道夫

### 要約

欧米諸国において不登校事例への対処の歴史は古く、様々な理論に基づき多くの事例が対処されてきた。それゆえ、個々の事例に関する論文に目を通すことで、いかなる理論に基づき具体的にどのように対処されたかが見えてくる。もちろん、わずかな事例を基にした対処の結果から理論や技法の効果について一般化をすることには疑問が残る。ただ、心理臨床家が目の前の不登校の子どもの心の回復や再登校及び学校生活への再適応を促すために真摯に臨床的実践を試みたことは大きな意義はある。また、様々な理論に基づく事例報告を読むことで、特定の理論や技法に固執するよりも、子どもの発達段階や不登校の状態像に応じ、複数の技法を併せて用いる方がより効果的であることが示唆される。そこで、本論文では最初に欧米の不登校に関する理論および対処法を概観する中で、特に今日の不登校事例の対処にも適用できるものは何かを明らかにする。続いて筆者が過去に対処した終結事例にそれらの理論や技法がどのように結びつかを検討した。

### はじめに

これまで本学の紀要では、伝統的な心理療法の枠組みを基盤に不登校事例の理解と対処法について述べてきた(寺田, 2005・2006・2008・2009)。特に重点を置いたのは、先ず欧米の不登校研究の足跡を辿ることで、先人がいかなる理論を背景にどのような対処を行ったかを自身の目で確かめること。不登校の事例を単に家族力動のみに帰属せず、「今、ここで」の子どもの状態像の理解に基づく対処を行うこと。そして、近年、不登校の原因を学校に帰属する風潮もあり、学校場面で不登校をいかに理解し組織的に対処するかを検討することであった。

以上のことから改めて気づいたことがある。例えば、特定の理論や技法のみで事例を理解したり対処したりすることの危険性。それと、目の前の事例に対処するためには不登校の多様なアセスメントの枠組みを持つことの大切さ。相談室での面接だけでなく、子どもの実情に合わせた子どもを取り巻く環境(物理的及び心理的)の調整。親や教師、友人たちの子どもへの機能的関わり。さらには相談機関や医療機関等のスタッフの直接的介入など。このような様々な理解や対処の枠組みを適用することで長期に渡り全く動きがとれなかった不登校の子どもが自ら現実に直面しようとし始めることを次第に確信するようになってきた。

今回の研究の目的は冒頭で述べたように、欧米における不登校事例への様々な対処法を概観し、効果や課題を整理すると共に、実際の不登校事例にそれらを複合した形で対処することの効果を検討することである。

### 1 不登校への様々な対処法

#### 1.1 不登校事例への対応・対処の4つのタイプ

不登校への対応や対処には基本的に4つのタイプがある。1つ目は教育現場で行われる対応である。身体症状を訴えたり、不特定の理由で欠席し始めたりする子どもや、数日間から数ヶ月間、さらには数年間登校できない子どもや親の相談に応じる時、学校側は不登校に関する十分な知識やアセスメントの枠組みを持たないまま親の戸惑いや焦り、不安な気持ちに耳を傾ける。担任は家庭訪問をしたり頻繁に電話をかけたたりして関係維持に努める。

また、今、子どもが家庭でどのような状態かを親との面談で表面的に理解できても、子どもと親や他の家族との心理的力動について深く理解することは難しい。結果的に歳月だけが流れ、当の子どもにほとんど動きが見られないままの事例も多い(「摸索期」に固着)。もちろんこのような対応が間違っているとは言えない。学校側にしてみれば、多忙な職務の中で精一杯できることをするしかないのも実際である。

2つ目は医療機関や相談機関での対処である。受診時に医師が子どもの身体的症状や親からの子どもに関する情報を基に診断名が付ける。その後心身の症状を軽減するために投薬を受けることが一般的である。一旦、診断名がつけば医師による検診や心理士による多様な理論に基づく対処法が駆使され長期に渡り面接は継続する。いわゆる傾聴や受容に徹するカウンセリング、自由連想

や夢、箱庭を用いた分析療法、行動や認知の変容を目的とした認知行動療法など特定の対処法に準拠することは多い。

第3のタイプには施設入所や適応指導教室等への通所による積極的対処がある。ここでは、生活支援、学習支援、さらに心のケアに関わる心理士など複数のスタッフが集団及び個々の子どもに関わるのが一般的である。長期間に渡り家庭に閉じ籠もったままの事例では、親の積極的な子どもへの働きかけで抵抗できず施設や適応教室に入れられることが多い。

このタイプの対処法では、心理士はカウンセリングやプレイセラピーによる自己理解及び抑圧された感情の解放といった心のケアを担う。さらに、支援員による協同生活体験や個別指導で社会性や学習の遅れを取り戻したり、傷ついた心や劣等感を少しずつ癒し、現実生活に直面しようとする意欲を培ったりするなど社会的適応力を促進する。

4つ目のタイプは、校内でのスクールカウンセラー（以後SC）による対処である。面接はSCが得意とする理論や技法に拠る個別のアセスメントやカウンセリング等の技法を駆使し行われることが多い。それゆえ、個別面接が中心となり、SCが病院や相談機関で日頃行っているスタイルをそのまま学校場面に持ち込むことになる。

上述した4つの対応・対処のタイプの中で、学校における初期の不登校事例への対処法として最も機能的なものはやはりSCを活用するタイプではないかと考える。その理由は、不登校は学校という場と直接関わる問題であること。子どもが登校を渋ったり、断続的な登校を繰り返したり、数週間、病気や経済的理由以外で欠席したりする子どもや親に心の専門家として早期に直接関わるができるからである。さらに、SCを介して学校が医療機関や相談機関に早期にリファーすることも可能となる。実際、SC制度の確立以前は、不登校開始から数週間から数ヶ月間、親や学校は困惑しながら試行錯誤的に子どもに対応したあげく医療機関や相談機関に通い始めることが一般的であった。

## 2. 不登校の発生及び促進の要因

不登校の要因は図1に示したように子どもの心の病や家族の機能不全といった従来の要因論に加え、近年は発達障がい起因し对人的不適応に拠ることが指摘されている。さらに、陰湿ないじめ問題も不登校の発生要因として急浮上しつつある、このような原因や要因に拠る不登校があるとしても、その占める割合は限られている。

それならば日本ではなぜ不登校が未だ12万人という

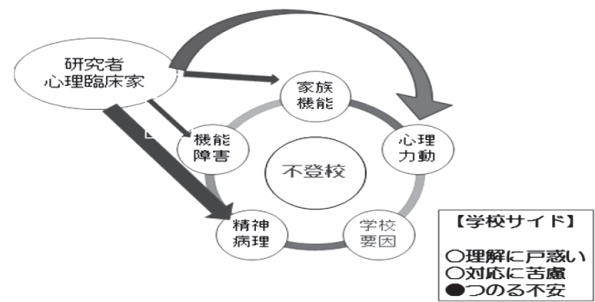


図1 不登校発生要因

数値に上るのかといった疑問が一層強まってくる。確かに「不登校」という用語は社会的に認知され、「学校に行かないこと」も容認されるようになってきた。しかし、それは極限られたケースにのみ当てはまるに過ぎず、親も教師も子どもの再登校を強く願っている。一方、不登校の子どもは学校に登校することや仲間と共に学習や生活することに不安になったり葛藤に陥ったりしているのが実情である。

不登校は欧米やアジア諸国など教育制度や文化が異なっても生じており、深刻な問題として着目され、解消のために様々な施策や法的処置すら行われている。また、対処事例について数年から十年以上に渡る予後に関する報告もみられる（Weissら、1967）。

日本においては先に述べたSC制度の確立や相談室及び適応指導教室での対応など学校場面においても不登校問題を解消するための積極的施策が行われ、それなりに再登校や学級復帰等の成果が見られることが指摘されている。だが、それらの施策や対応による効果とその予後に関する因果関係の検証はまだ十分とは言えない。

また、臨床心理士やそれに類するカウンセラーがそれぞれの理論や技法に基づき医療機関や相談機関において不登校事例に対し個別の面接を行い、過去20～30年間に渡り膨大な対処事例が学会発表や論文誌上並びに著書の中で報告されている。しかしながら、個々の事例研究や事例報告で明らかにされた事象が、相互に関連性を持ちながら、より集約された理論や技法へと発展することは少なく、一発試行に留まることが多いと言えよう。確かに不登校事例は、あくまで個別なものであり、事例への対処から導き出された個別の事実や成果を他の事例に汎化することへの懸念や抵抗は大きい。それゆえ、個々の事例のレベルに留まらざるを得ない。

## 3. 不登校状態の進展のプロセス

不登校の理解を例に上げて述べるならば、母子分離不安が真因であるにしる、子どもの自我の未発達に起因するにしる、さらに、学校場面の出来事にしる、原因やきつ

かけはいずれにせよ、子どもは登校をしぶり始め、続いて登校を自分の意志で拒否したり、様々な身体症状を訴えたりして学校を連続して欠席するようになる「しぶり期」や「混乱期」に至る（吉村，1989）。この2つの時期には個人差はあるもののほぼ類似した状態像が見られる。もちろん、「混乱期」は、親も我が子の現実を受け入れることができず、執拗に登校を促したり、親としての自信を失い藁をもすがる思いで医療機関や相談機関に子どもを連れて行こうとしたりする。

しぶり期や混乱期の親や教師の対応次第で早期の学校復帰及び学級への再適応が可能となるか、それとも、さらに家庭内での混乱状態が続き、そのまま長期の不登校状態に陥るか異なってくる。それだけに半世紀以上前から不登校の初期における早期対処の必要性が強調されている（Waldfoegel,S.,Teeman.E, & Hahn.P,A.,1959）。

親がやがて力尽き子どもの現実を受け入れたり黙認したりすることで、子どもの言動は和らぎ暴言や暴力が収まってくる。親や教師の目からすれば「怠惰」「無気力」そのものに思われるが、当の子どもにとってはこれまでの外圧から解放され表情や言動も穏やかとなる「模索期」に至る（吉村，1989）。

模索期は子どもにとっては安寧の日々である。模索期は親子関係にも大きな変化が生じることは古くから指摘されている。たとえば「二次的利得」ということばがあるように（Klein,1945）、最初の原因や理由は曖昧となり、学校に行かずに終日家にいることで、子どもは自由にTVをみたりゲームをしたり、暴力的言動に出れば親の不安や恐怖を煽り親子関係を逆転することも可能となる。このことが不登校状態の長期化を容易とする。

家族や教師にとってはほとんど身動きができないだけに、内心、苛立ちや焦りの気持ちが増す。矛先は子どもを取り巻く他の家族に向けられ、家族の間で緊張感や不満がつることが多い。長いトンネルの中を歩くように、行き先が全く見えず、家族の会話や相互の関わりも少なくなる。

同様のことは学校にも当てはまる。子どもは教室に確かに居ないのであり、居なくとも学級集団はいつものよ

うに活動し、時刻がこれば教室から全員が居なくなる。このようなごく日常性の中で毎日が過ぎていくことになる。何をどのようにすれば良いかが見えないまま思いつきで不登校の子どもと接触しても、子どもの方から閉め出されることも多い。結局、学校としても全く身動きが取れない状態となる。

もちろん模索期が長期に及べば子どもの学校に対する不安は汎化することが多い。最初は担任や学級の特定の子ども、特定授業や教室といったごく限られた対象であった。しかし、欠席日数が増えるに従い、校舎や運動場など様々な対象に強い不安感を訴え、再登校や学級復帰は難しくなる。それゆえ、たとえ模索期にあるとしても、長期化を防ぐために可能な限り早期に学校復帰させるべきであるという考え方が生まれてくる（Warren, 1948）。

#### 4. 不登校の対処法

不登校の事例にかかわる場合、どのような対処法が用いられるのだろうか。この問いについては、心理療法に関する諸理論及び支援のための技法を整理することで多くの示唆を得ることができる。ここでは先ずこれまで多く採択されてきた不登校事例に対する技法についてその概要を述べよう。かつて多くの心理療法家たちが日々の事例に試行錯誤的に対処したアプローチを概観することは、その背景にある理論に基づく具体的対処法そのものを理解することに繋がる。この問いに対する先行研究を包括的に概観しているのは Blagg (1987) である。彼の著書の記述内容を手がかりにさらに整理してみよう。

##### (1) 心理的力動に着目した分析的療法

###### 分析的療法について

基本的に子どもの不安や恐怖心を前提に関わる。学校場面の出来事に対する不安や恐怖体験から子どもが登校をしぶったり拒否をしたりする。このような現実的な理解に加えて、家族内、特に母子関係に着目し、母子同席の面接をしたり分離して面接をしたりする（Johansonら, 1941）。母親との面接では、現在の状態像を明らかにすると同時に、子どもの出生に関わるエピソードやその後の養育に関わるエピソードが語られることが多



図 A



図 B



図 C

い (Estes et al.,1956 : 図 A ~ 図 C 参照)。さらにまた、母親自身の幼少期の家族とのエピソードや両親のエピソードまで遡り焦点が当てられる。

そして、母親や子どもとの面接を通して得られた多くのエピソードから導き出される心理的力動(防衛機制等)を基に、子どもの不安や恐怖心の源が何に起因するかを浮かび上がらせる。子どもにおいては、不安や恐怖心が強い場合や幼いために言語化できない場合は、遊びや描画等を介して抑圧された感情や欲求を表現させることで、次第に不安や恐怖を軽減し、本来の自己のあり方を洞察し自己決定を促すことに主眼が置かれる。

さらにまた、教師や級友に強い不安や恐怖心を抱き不登校に陥った子どもにおいては、厳格な親や表面的には温和な親に対する怒りや攻撃性、葛藤が、そのまま学校場面の対象に置き換えられたものではないかと分析する。

いずれにしても、分析的対処法においては、「今、ここ」の出来事を誕生期にまで遡り理解しようとすることに主眼が置かれることが多い。

#### 分析的療法における多様なアプローチ

親子の心理的力動の理解にもとづく療法ではどのようなアプローチが導入されているのだろうか。

##### a. 父親の存在にも着目

分析的療法では、特に分離不安に象徴されるように密着した母子関係に着目した対処が主としておこなわれる (Eisenberg, 1958;Estes et al.,1956)。しかし、父親を家族システムに位置づけることで、家族機能の回復や進展が見られることを強調する立場もみられる (Malmquist,1965;Skynner,1974;Framrose,1978;Hsia,1984)。

##### b. 学校復帰という現実への直面

不登校の子どもを早期に学校復帰させることに批判的な立場をとる療法家は少なく、むしろ積極的に学校復帰させることに力点を置く療法家は多い。もちろん、子どもの状態像や精神病理を十分考慮することは言うまでもない。その前提に立ち子どもの恐怖心や不安を軽減するための様々な工夫をし、早期に学校復帰させることの重要性を強調する (Klein,1945;Eisenberg,1958;Skynner,1974;Framrose,1978)。

##### c. 母子分離への積極的介入

母子のアンビバレントな心理的力動が両者の分離不安を増長させ、結果的に子どもが登校を拒否したり、母親が言葉や態度とは裏腹に子どもを家庭に留まらせたりする事例は多い。母子関係に父親やその他の家族が介入しようとするればするほど一層母子の関係は密着した状態になる。それゆえ、面接場面で

母子分離が難しく、母子同席のまま面接を行わざるを得ない事例もある。確かに母子を分離させることの難しさや危険性はあるが、それを行うことで事態が一気に進展することは分析的療法においても実証されている (Johnson ら,1941)。

他のアプローチとしては、親から分離させるために不登校の子どもを一時的ないし長期に渡り病院に入院させたり施設に預けたりする対処法がある。入院による対処のメリットとしてあげられることは、第一に家庭や学校以外の場に子どもが直面できる。第二に病院内や施設内の学校に登校することで学習への劣等感や不安が軽減される。第三に、共に生活する仲間との新たな出会いや体験をすることで社会性が育まれることが強調される (Warren,1948)。しかし、もう一方で母子分離を促すために病院やその他の施設に子どもを入れて対処することに否定的な知見もある (Weiss ら,1964)。

学校復帰については病院と学校が連携することや家族との連携の必要性はもとより、再登校に際しては治療者の随伴登校も導入する。その後のフォローアップの結果、59%が再登校または就業し、その内の33%が対人関係においても適応していることが報告されている (Berg,1970)。しかし一方で Berg ら (1976) の報告で指摘されているように、家庭から分離する対処法が必ずしも子どもの社会性の発達や心の健康の増進と結びつかないことが示唆される。

##### d. 家族療法の導入

家族から子どもを分離する対処法に警鐘を与えるのが Valles ら (1984) である。彼らは多くの入院による対処を経験した子どもたちのその後のフォローアップを行い、面接インタビューを用いて社会的適応性の進展の有無を報告している。調査対象者の約20%が再登校し、大半が家族機能の安定さが背後にあることを指摘した。換言すれば不安定な家族の子どもの場合、学校復帰の促進を抑制することを意味する。

Skynner (1974)、Framrose (1974)、Hsia (1984) らは、母子の密着した関係性を崩すために、父親の機能を高めたり、家族以外の人を介入させたり、教育環境を整えることの必要性を強調した。

#### (2) 行動変容に着目する対処法

20世紀前後に着目され始めた条件づけの理論は、刺激を統制することで行動にどのような影響が見られるかを解明する。特に1950年代に条件づけ理論が一躍注目されることになったのは子どもの問題行動の

解消にこれらの理論を積極的に適用しようとする動きが見られたことに拠る (Wolpe, 1958・1961; Eysenck, 1960; Lindsley & Skinner, 1954; King, Merrell, Lovinger & Denny, 1957; Ferster, 1961 ら)。

Blagg (1987) は学習理論に基づく様々な行動的アプローチを不登校事例に用いた論文をそれぞれの理論的枠組みから取り上げて紹介している。

### ① 古典的条件づけに基づく対処法

いわゆる「刺激」と「反応」という単純なモデルを不登校事例に適用する。Wolpe (1958) の「逆制止療法」(reciprocal inhibition therapy) は古典的条件づけ理論を不登校事例に適用した最初のものである。「不安や恐怖、緊張感と相容れない反応が、その場面で喚起できれば不安や恐怖、緊張感は低減され消去することができる」というのがこの理論の基本である。それゆえ、不安や恐怖心が強いために再登校したり学級復帰したりすることができない子どもを現実場面に晒すことに重点を置く対処法で、以下の技法等があげられる。

#### 系統的脱感作法 (systematic desensitization)

真っ先に登場するのは不登校事例に行動療法を適用した先駆者として不登校関連の論文誌上でしばしば紹介されている Wolpe (1958, 1961) である。彼は逆制止と脱感作の考え方を組み合わせて「系統的脱感作法」を考案した。登校時に強い不安や恐怖を示す子どもに対して不安や恐怖を覚える場面を段階的にとらえる (不安の階層表) とともに、弛緩法を子どもに適用した。そして、最も低い場面から次第に最も高い場面へと順次イメージさせ、不安が高い時は弛緩法を適用することで、不安や恐怖心が軽減する効果が見られることを報告している。同様の技法を用いながら子どもの登校に随伴した Garvey と Hegrenes (1966) は 20 回の対処の結果、正規に登校し、2 年後も再発しなかったことを報告している。

#### フラディング (flooding)

登校することや教室に入ることに強い不安や恐怖を持つ子どもを力づくで親やカウンセラーが登校させたり教室に入れたりする技法である。現実場面に子どもを晒すことで次第に不安や恐怖が軽減し再登校や学級復帰が可能となるといった技法である (Levis, 1967; Stampfl, 1968; Croghan, 1981)。

#### インプロージョン (implosion)

この技法は、基本的にはフラディングと類似しているが、不安を生じる場面をイメージさせることで次第にその場面に対する不安を軽減するというものである。この技法は古典的条件づけの消去モデルに基づく。特に

1960 年代には主に神経症や精神病のクライアントに適用され、不安軽減に効果が見られることが報告されていた。(Levis, 1967; Stampfl, 1967)。しかし、子どもに関する臨床例の報告は見られなかったという。

Smith ら (1970) は学校や教室に対して強い不安を示す子どもに implosion を適用した。

Implosive 療法は子どもに現実場面を想起させると同時に、不安が一層増す場面に次第に直面させるという特性がある。そのため、家庭では学校に行かないことで子どもにとって二次的利得 (TV が観られるなど) となるものを排除する必要がある。また、家庭と学校との信頼関係の上に立ち対処することが前提となる。そこで、両親と学校管理者の完全なコラボレーション (協働) の体制を整えることが当面のテーマとなる。

#### シェイピング (shaping)

漸近的接近法 (successive approximation) とも言われ、不登校の子どもの目標行動を細かく分けて当面容易と思われる行動から順に取り組みせ、具体物や賞賛のことばかけで強化しつつ最終目標に到達させるといった技法である。

これらの古典的条件づけの技法は、実際の不登校への対処として単独で用いるより、同類及び他の理論に拠る技法など複数の技法を併用することが一般的であり、学校復帰や学級復帰には効果的であることが指摘されている。

#### リラクゼーショントレーニング (弛緩訓練法)

これらの療法を実施するにあたりしばしば併用されるのが筋肉弛緩訓練である (以下、弛緩訓練法) である。この方法では、不安や緊張が高く身体症状や回避行動を訴える不登校の子どもに意識的に筋肉を弛緩させたり呼吸をさせたりすることでその低減を促す。親に訓練の仕方を記録した媒体 (テープや DV など) を与えることで、弛緩訓練法を家庭でも継続して行うことができる。幼い子どもでは継続することがしばしば困難なため、訓練の時間を短縮したり人形 (robot-rag doll) を用いたりすることで訓練に意欲的に取り組ませることができる (Kendall et al., 1992)。

### ② オペラント条件づけに基づく対処法

行動療法の中核と言えるものにオペラント条件づけがある。たとえば、朝、登校をしぶったり大声で喚いたりする子どもに対して親は過剰に反応し、声をかけたり力づくで登校させようとしたりすることは多い。親子がやりとりをする内に登校時刻は過ぎ、結果的に子どもは学校に行かなくても済む。このような親子のパターンを整理すれば、子どもの言動に親が過敏に反応し親が積極的

に働きかけることで、子どもの登校拒否感情や行動が一層強化されるという見方をする。

それゆえ、朝の悪循環を回避するため子どもの登校拒否に関わる言動に親は一切反応せず、登校時刻になったら有無を言わず子どもを学校に連れて行く。これは一般的にタイムアウト技法と呼ばれるものである。

さらにまた、子どもが登校をしぶり家庭に留まることで、TVを見たりゲームをしたり好きな時間に起きたりするなど自分の我が儘がすべて認められる（二次的利得）。結果的に抑圧されていた自分を親の支配から解放する。このような二次的利得に抛り、子どもが家庭に長期に渡り居続ける事例は多い。二次的利得を軽減したり抑制したりするためにしばしば用いる技法に拮抗条件づけがある。これは、子どもが家にいる時は、TVやゲーム等の娯楽を一切禁止する。朝、力づくでも決まった時刻に起こし家族と食事をさせるというように、これまで容認してきた行動を全て制限するという技法である（Ayllon, Smith, & Rogers, 1970）。

親への心理療法家による積極的介入は、長期に渡り学校を欠席している子どもの行動に変容を促すことは多い。先の Ayllon ら（1970）の対処事例の効果の一因として不登校の子どもへの親の意欲の高揚が示唆される。親の関わりを意欲づけるためには、親に対処法の基本的な考え方や技法の理解を促すと共に日々家庭で親としてどのように関われば良いかを具体的に示すことが大切となる。

行動そのものを変容させようとする対処法に不安となったり抵抗したりする親は多い。それゆえ、親に対して行動療法の理論の枠組みをできる限り分かりやすく説明した上で、一定の対処モデルに従い親を訓練することは、不登校の子どもを早期に再登校させたり学級適応させたりすることに結びつくことを指摘する立場は多い（Vaal, 1973; Forehand, 1979; King, 1984・1987）。もちろんこの対処法が全ての事例に適用するとは限らない。

#### **随伴性契約法 (contingency contracting)**

これは Homme（1966）が学習課題を達成させるために用いた技法と言われる。具体的には不登校状態の子どもに心理療法家が寄り添いつつ、登校に向けた行動面の約束をするというものである。Welch と Carpenter（1970）はこの技法を数週間不登校状態にあった8歳の少年に適用した。Vaal（1973）は同様の方法を半年間不登校状態にあり、親が登校させようとするときしばしば大声で泣きわめいたりする13歳の少年に適用した。ここで興味深いのは、親や教師に加え当の子どもに対してこの技法について説明している点である。

彼らは、癩癩なしに学校にくること、予定の全教室に

登校すること、毎日、終日学校にいることという3つの行動を上げた。さらに、この契約に合えば帰宅後に様々な活動をさせるという約束をした（例 プロのバスケットボールの試合に行く、土曜日にボーリングに行く、近所のプロの選手に会う、放課後に友達とバスケをするなど）。結果として当初は容易ではなかったが次第に学校にいる日数が増え、残り3ヶ月には完全に登校できるようになったことを報告している。いわゆる登校することや授業を終日受けることを子どもと心理療法家の共通の目的として、目標が達成できたらプラスの活動を保障するという技法である。

#### **ソーシャルスキル訓練**

不登校の子どもが以前からも級友や先生など他の人たちと上手く関わるができないために、授業場面のトラブルに対処できなかつたりいじめの対象となったりすることが多いことは指摘されている（Blagg, 1987）。それゆえ、社会性の技能を向上させるための訓練（ソーシャルスキルトレーニング）を不登校の子どもに行うことで不安や恐怖心及び緊張感を軽減し、現実場面に対処することを試みようとする理論である。その先駆けとなるのが Esveldt-Dawson ら（1982）の実践である。

#### **③複合的アプローチ**

不登校事例に2つの行動理論を複合して用いる試みは半世紀以上前から行われてきており、ここでは興味深い対処事例の概要を述べることにする。

#### **Patterson（1965）の対処事例**

対処事例 母親からの分離不安が強い7歳の少年

方法1・人形（少年の代替物）を用い、様々な場面で人形がどのように感じるかをたずねた。その時の自己主張や独立を示唆する反応を「ほめること」で強化。

方法2・11回目に系統的脱感作実施

方法3・心理療法家が子どもを毎日学校へ連れて行く  
長期間学校に一人でいられる。脱感作はプレイルーム内で連続し実施

方法4・親に対し選択的な随伴行動を訓練

結果・終日学校復帰。3ヶ月後のフォローアップ（一般的適応に著しい変化）

#### **Lazarus, Davidson, Polefka（1965）の対処事例**

Lazarus ら（1965）は、古典的条件づけおよびオペラント条件づけを単独で用いるよりも両者の特性を理解した上で複合的に用いる方が効果的であるという立場に立ち心理療法を行い事例への対処でその効果を検証した。  
対処事例 学校場面での分離不安が長期に渡る9歳の少年

来院までの経緯：人が溺れるのを目撃

きょうだいの友達の死

方法1・メージ法による系統的脱感作法で葛藤を解決

結果・はっきりしない応答や従順さにより対処を中止

- ・感情を吐露することに対して心理療法家からほめられることに関心を示す

方法2・現実場面での脱感作実施

- ・気晴らし、ユーモア、おだて、励まし、情緒的イメージ

方法3・朝の不安軽減のため主治医によるやさしい対応

方法4・登校のための活動（特別の仕事）

方法5・学校のある時間に家にいることを許さない

方法6・強化のための報酬（漫画・クラブなど）

方法7・母親が「登校は強制であり、だめなら他の人が行うよ」と話す

結果・3週間後、報酬なくとも普通に登校

- ・10ヶ月後のフォローアップ（一層進展）

#### ④アセスメントの大切さ

Cautela (1968) は「行動療法におけるアセスメントについて誤解が広まっている。」と述べている。誤解の背後には第1に理論そのものはよく定義されているものの、悪い習慣を定めてそれを消去するといった型に嵌ったもの思われること。第2は、事例報告では、不適応行動の顕現と治療の簡単な記述、そして6ヶ月間再発が無かったという内容を公表するだけで、診断や治療の過程の十分な理解に欠かせない多くの詳細な事項に触れていないということが上げられる。それに対して彼は行動療法においても心理療法家が以下の3つの時期にインタビューや質問紙さらに行動観察を通してアセスメントを行うことで、綿密な対処プログラムを構築したり対処結果の効果を検討したりできると主張している。

第1期 不適応か否かを決定する

第2期 3段階における対処の方略を行う

(対処手続きの決定・進行中の対処の評価・  
対処の継続の決定)

第3期 対処結果についてフォローアップする

#### (3) 心理療法の比較検討

心理力動的アプローチと行動療法的アプローチなど複数の対処法の効果について比較検討した研究は少ないと言われている。その理由として Berecz (1968) は多くの不登校の対処法の研究で明らかにされたことは、いわゆる一発試行によるものが多いことを指摘した。一方、Miller ら (1972) は6歳から15歳までの67名の不登校の子どもに対し、逆制止療法、心理力動的療法および統制群としての待機という3つの対処法のその後の効

果について検討している。その結果、いずれの対処法も効果が見られ、有意な効果は時間の経過や子どもの年齢に拠るものであり、対処法の違いによる効果を検証することができなかったことを報告している。

Blagg (1987) は Miller ら (1972) の研究を紹介しながら、対処法の効果を比較検討する場合の問題点として、何を基準に効果を検討するかということや予後の調査の難しさを上げている。

日本においても不登校問題は今日深刻化しており、不登校事例に対する効果的な対処法が学校場面で強く希求されている。しかし、不登校といっても様々な原因や要因がありタイプも多様である。それだけに個々の事例にどのように対処すべきかを検討することはとても難しいと言えよう。ただし、先の章で取り上げてきた主な対処法の理論や技法の方略を成果と課題を理解し、複合的に活用し個々の事例に対処することはできよう。

そのための視点として Blagg (1987) は「対処のためのプログラムを提示する以前に様々な情報を入手することが必要である。」と述べている。そのための方略として以下の7つのポイントを挙げている。

- ① 子どもや親の動機づけの高さを評価する。
- ② 二次的要因による不登校の進展を防ぐために早期介入をする。
- ③ 最初に時間をかけて詳しくたずねる（インテーク面接）。
- ④ 初回の面接場面の設定に細心の努力をする（時には子どもも同席）。
- ⑤ 親、子ども、教師を分離して面接をする。
- ⑥ 親が消極的タイプや抵抗が強い場合は、面接の意義について親の理解を促す。
- ⑦ 親や子どもの不安を軽減するための工夫をする。実際に不登校事例に対処する場合、この方略はおそらく多くが適用可能といえる。

## II 実践例

筆者は昨年度の本紀要のあとがきで初めて不登校事例に対処した当時、行動療法に関する文献に強く関心を寄せていたことを述べた。今になって思えば、長期に渡り家庭に閉じこもる子どもの二次的利得の問題や家族の混乱、さらには学習面の遅れから再登校や学級復帰に不安を強める子どもの心理的動機に当初から着目し始めていたと言える。Blagg (1987) が示唆するように、子どもにとっての現実とは学校生活や仲間との関わりであり、不安や葛藤に苦しみながらも目の前の現実と直面することで新たな気づきや自己が築かれると言える。もちろん、

一人で現実に直面するには多くの障壁がある。家庭内の居場所づくりに向けた家族の理解と協力体制は不可欠である。さらに「登校したいがとても不安」「もしも登校した時に何か言われたらどう答えればいいのか」といった気持ちが同時に錯綜するわけである。

これらの実際の障壁を解明することや、子どもの心理的力動の理解に基づいたきめ細かな対処法が求められることは言うまでもない。

Iで述べてきた様々な心理療法によるアプローチは、まさに不登校の子どもが現実に直面する上で心理療法家が子どもの状態像や段階に応じて何が支援できるかを示唆する。もちろんそのためには、特定の理論や技法に固執するのではなく、分析的療法、カウンセリング、行動療法、認知療法、心理教育等、個別の対処法の幾つかを併せて対処する、いわゆる複合的アプローチの視点に立つことの大切さを意味する。

不登校の子どもは心理的力動はしづり期に始まり、混乱期、模索期、さらに回復期、そして自立期に至るまで各時期において多様に変容する。このことを考慮すれば、各時期に応じた複合的アプローチを導入することは、不登校の子どもは不安や葛藤、膠着状態にある生活様式、強い劣等感による学習回避、さらに、学校復帰や教室復帰、進学といった個々の当面の課題を解決することに結びつくことを考える。

不登校開始の混乱した時期や身動きが取れない時期にカウンセラーや学校はどのようにかかわれば良いのだろうか。今回は、「模索期」の不登校事例へのカウンセラーや学校の対処のあり方について先行研究のアセスメントの知見を拠る所に、具体的事例への関わり方を述べることにする。なお、本事例は該当者の同意を得て第31回日本心理臨床学会で口頭発表したものを加筆修正したものである(注1,注2)。

### 1. 不登校事例(中1A)の概要とアセスメント・対処法 相談受理

○発生と以前の概要：X年7月、学校の催しを参観した祖父がAの作品を見て苦言。以後、不機嫌となり登校を拒否。小学校低学年に多動で注意。親は学校批判、他の子どもからいじめられる。

○相談受理：X+1年5月に中学の担任(生徒指導)が相談室来談

○状態像の理解

- ・家庭：学校不信・相談機関依存・焦燥感と絶望感
- ：家族力動 祖父(絶対的存在)・父親(アンビバレントな対応)・祖母と母親(膠着状態をめぐり対立の顕現化)

- ・学校：親との連携ができず当面の対応に苦慮・戸惑い

- ・子ども：周囲の働きかけに怒り表出(孤立)。外出拒否。日々ゲームに没頭

#### ○対処法示唆

- ・对学校：状態像理解(A・家族・校内体制)と役割の明確化

- ・对家族：当面の課題の明確化(相談場所の移行・Aの状態像の理解)

#### ○今後の対処

- ・母親面接実施：キーパーソンの心の安定・Aとの出会いと良い関係づくりのコーディネーター役

- ・学校との連携による支援

#### ○対処経過 その1

- ・6月/母親来談：Aの孤立状態・親の不安&不満・祖母の干渉

- ・7月/母親・祖母来談：両者の会話から母親と祖母の間でAへの対応にズレが見られることが明らかとなる。この場ではいずれの立場にも寄り添えないCPに両者が不満を語る。

- ・「不登校の子どもの夏休みの対処法」(寺田, 1992; 横湯, 1988)を基に夏休みのAの過ごし方について以下のように助言した。

- ：学期中は不登校状態であっても常に学校のことを思い、Aはそれだけにとても疲れている。

- ：夏休みになれば誰もが学校に行かなくてもよいのでAの心は軽くなる。

- ：当面はAに対する指図を控え、自分の時間を与えるため、ゆっくりと休ませることが大切である。

- ：ただし、休み中だから第三者との出会いや介入も可能となる。

a. 訪問による出会いと遊びを介した良い関係づくり

親面接で夏休みに入りAがとてもくつろいだ状態にあることがわかる。そこで、CPがAとの出会いとよい関係を作るために家庭訪問をすることを親に諮った。了承を得たので予定の日時にAには予告しないことを条件に以下のように訪問した。

○8月：突然の家庭訪問とよい関係づくり

- ・居間でゲーム中のAに偶然出会うことができた。Aは見ず知らずのCPがいきなり声をかけたことに一瞬驚いた。TVゲームが好きなのがわかっていたため、すかさず「そのゲームはどのようにするの」とたずねると、無言でゲーム機を手渡した。CPが一生懸命になるほど上手くできない様子を見かねて、「おっさん



へたやな〜」の言葉を発しつついいねいに手ほどきをし始めた。全く会話もないまま1時間ほどが過ぎた。そこで「また来るよ」と声をかけて部屋を後にした。

- ・数日後、再び家庭訪問すると、待っていたかのようにゲーム機をCPに手渡した。前回よりもゲームのやり方について声を出して丁寧に助言をしてくれたり、初心者向けのレベルに合わせてくれたりした。こうして数回の出会いを通してAとのよい関係が生まれた。

#### b. 不安の軽減：不安の段階的軽減の工夫

##### ○9月～10月：犬を介した外出

- ・ゲームの後に「少し外に出ないか？」と声をかけると、犬を連れて行くと言う。解放された犬に引きずられるように家を出て、自宅裏の人通りが少ない山道への散歩が始まった。途中で近所の人に出会うと駆け足で進む（このことから対人不安が強いことが解る）。週1回の訪問で散歩の距離は次第に伸び9月末には3km近くになる。
- ・車による外出を誘った。自宅付近の公園に出かけたが、車中で小学校時代の自分の思い出を溢れるように話し続けた。CPはただ受容的に聴くだけであった。到着した公園では、やはり人混みを避けていた。ドライブで平日の日中に平気で外出できたことに家族は驚いた様子であった。
- ・その翌日、母親から「AがCPにもう会いたくないと言っています。どうしたらいいですか」と不安げに電話でたずねてきた。おそらく、余りにも急激な変容に、家族が次の段階（再登校）へ進むことを過剰に期待し、直接、これを言葉にされたため不機嫌となり、CPを拒否するといった行動に出たのだろうと考えた。そこで「当分はAの言うように訪問はしません」と伝えた。数日後、再び母親から「AがCPに会いたいと言っていますので」という訪問依頼の連絡が入る。再び訪問すると、待ちかまえていたかのようにゲーム機を手渡したり飲み物を自分で準備したりした。こうして、以前のような関係が続くことになった。

#### c. 段階的登校への対処：随伴登校

##### ○11月：夕方登校への試み

- ・散歩の距離は更に伸び、学校付近まで到達した。歩きながら校舎の説明や小学校6年に一度だけ行った中学校の一日入学の体験を話す。
- ・漸くAが登校への意欲を発現し始めたと考え、登校のための環境作りの必要性を感じた。そこで学校で担任及び管理職にAの状態像の変化を説明し、登校のために2つの条件を設定した。①登校時刻は他の生徒が全て下校する夕刻とする。②事前にAに登校を

周知する。

- ・いざ学校に向かって出かけるとなると不安が強いのかゲーム中に多弁となり、何度もゲームを繰り返し、5時過ぎになりようやく自ら立ち上がった。辺りが薄暗い中、犬を連れて学校へと向かった。学校近くまで来ると、とても緊張し不安げな言葉も多くなった。Aの提案で、学校の裏側から校舎に向かうことにした。途中で民家の犬に吠えられ駆け足で走った。暗闇の中、ようやく灯りがついた校舎に到着した。玄関には担任と管理職が待っており、その後の対応は担任にバトンタッチした。担任が校舎内を案内し、ついにAは自分の教室に入ることができた。しかし、このような夜間登校はAにとってかなり抵抗があり、次回の挑戦を自ら拒否したため、以前と同様の対処となった。

#### d. 分離の工夫 家庭を離れて生活する

##### ○12月：宿泊施設の入所体験

- ・行動範囲はさらに拡大し、日中に様々な場に出かけても周囲の人目を気遣うことは無くなった。そこで、宿泊施設を持つ機関のスタッフに相談し、宿泊体験を家族に提案した。数日間の宿泊体験であったが、初日は母子随伴、2日目はCP随伴の宿泊体験を行った。結果は、戸惑いながらも施設の日課を他の子どもたちと一緒にこなし、3日間を過ごすことができた。
- ・体験を終えて、入所の意志を確認するとはっきりと拒否した。しかし、この宿泊体験がその後の進展に結びつくことになる。

#### e. 現実への直面1 不安・葛藤の吐露と支援

##### ○1月：葛藤

- ・雪道を散歩する途中、Aが突然、「ぼく、施設に入らなければいけないかもしれない」と不安げに話した。おそらく登校への動きが膠着状態にあるため、家族の中でも苛立ちや焦りが高まり、施設入所への意向が強くなってきたものと思われる。入所について本人の気持ちをたずねると「ぼくにはどうしたらいいかわからない」と話す。

##### ○2月：生き方の示唆と自己決定

- ・自宅を出て車の中でCPはAに次のように話した。「A君のこれからのことについて私の考えを話すよ。今の生活のまま家に居ることも良いけれど、その他にもできることがあると思う。例えば以前体験したような宿泊施設に入りそこから学校へ通うかとか、親戚から別の学校へ通う方法もある。そして、もう一つは、君が一番嫌がっている地元の学校へ行くこともやってみる価値はある。ただ今のままの生活よりも一歩前に進むことで、A君自身の可能性や将来が拓いてくると

思う。あとはどうするかを決めるのは君自身だね。」

- ・その日の夕方、突然、母親に再登校に向けた意欲を示唆する言葉を話し、翌日から教科書の準備など登校への兆しが頻繁に見られるようになる。

#### f. 現実への直面 2 父親の積極的関わりと A の自立

- ・家族の A への対応にも変化が見られ、父親を中心とした A への関わりが一段と強まり、父親が自ら入手した他県の宿泊施設を持つ学校への入校を A に勧めた。親子で見学し、結果的に A は入所の意志を固め、2 年生の 4 月から入所し登校を始めた。
- ・CP がその後直接 A やその家族に対処することはなかったが、学校の相談担当者との面談や母親から届く賀状で A のその後の行動や心の成長に関する情報を得ることができた。

その後（学会発表の同意を得るため家庭訪問）

#### ○母親と面接（X + 17 年 3 月）

- ：入所後は毎日、涙。
- ：毎週の再会で安堵「別れが辛かったです。」
- ：次第に現実を受け入れ・・・「子どもを包みこんでいたことに気づいた。」
- ：「今は毎日会社に出勤し、地域行事にも積極的に参加している。」
- ：「わが子のたくましさに喜びを感じると共に、あれで良かったと、今になって思える。」

## 2. 考察

この事例では学校関係者との面接で学校時代からの不登校の経過の概要をうかがい、不登校の発生の直接的原因に祖父の言動に対する怒りがあることは明らかとなった。ただ、背後には、祖母と母親との確執、父親の父性の脆弱さ、さらには、母親の我が子への過剰なまでの愛着など様々な家族の心理的力動が働いていることが示唆された。そこで、当初の面接はキーパーソンである母親を支えることを目標とした。しかし、祖母の面接場面への登場でこの目標は壊れることになった。

複雑な家族の心理的力動を考慮した時、身動きがとれない A への直接的介入を試みることにした。幸い夏休みの時期であり、子どもも心理的に解放され、第 3 者の受け入れも可能になるという考え方に準拠したまきまきに行動療法的アプローチである。もちろん、A にとって CP は見ず知らずの人物であり、出会うことで不安が一層高まる危険性は十分ある。それを防ぐためにあえて A には予告せずに訪問し、ゲームを介して対処したわけである。

一旦、よい関係が生まれれば、後はそのまま継続して

いくことになる。しかし、CP はあえて A を外に連れ出すという技法を試みた。それを援助したのが飼い犬であった。大きな犬が解放された嬉しさから先へ先へと A を引いていく。ここに犬は A にとって不安を軽減する存在となり、完全な不登校状態になり一度も家から出ることがなかった A の目に周囲の家や田畑などさまざまな現実の風景が蘇ってきたのである。

もちろん、このように急変した A の様子に家族は驚きと同時に次のステップを期待するのは当然の心理である。結果的に再登校を迫り、CP もその怒りの対象となり、A 自ら関係を絶つことになった。しかし、距離を置くことで再びよい関係が生まれた。その後は、再登校に向けて少しずつ行動範囲は拡大し、ついに夕方の登校が可能となっていった。

後は学校側に対処の役を一任し、CP は見守り寄り添うという役割を演じようとしていた。実際にはその計画は A の意思により頓挫し、再びよい関係のみとなった。

再登校という対処の目標が消えた今、A を自立させるためには家庭から分離することが必要ではないかと考え、子どもを支援する施設のスタッフとの連携で、わずか数日間の宿泊体験を試みた。その結果、A は初めて自分の意思で家族以外の人たちと生活を共にする力があることに気付くことができたのである

家族から離れて生活することに不安や葛藤はあったが、父親の父性の新生により自ら新たな一步を踏み出した事例と言えよう。

注 1) 本事例を扱うに当たっては、本人および親の了解を得ている。尚、記述内容については個人が特定されないよう留意した。

注 2) 本事例は日本臨床心理学会第 31 回大会にて口頭発表した事例を加筆修正して記載したものである。

## おわりに

今回はかなり古典的ともいえるべき不登校の対処法の理論やその方法を概観した。心理的力動理論にしる、行動理論にしる目の前の不登校の子どもをいかに理解し、子どもの再登校や学級復帰など現実場面への直面を促すかを常に念頭に置いて対処されていたことがよく分かる。さらに、1 つの理論や対処法に固執するより、それらを複合して対処することの効果も多く心理臨床家が示唆している。

臨床場面で不登校の事例に対処する場合、子どもや親の状態像を明らかにすると共に、子どもの発達段階や家族力動、さらに、学校生活への不安や葛藤を適切にアセ

スメントすることが対処する以前に不可欠と言える。今回取り上げた臨床事例への対処も、結果的に家族の心理的力動の理解を基盤としながら、ほとんど身動きがとれない時期（模索期）の不登校の子どもに対しよい関係を保ちつつ多様なアプローチを用いたことになる。

ただ、行動の変容を目的とすれば、子どもは時には不安や葛藤が強まり、自ら退行することもあり得ることが分かる。それゆえ、心理臨床家には子どもの心の動きを絶えず受け止める態度が求められる。それと併せて、子どもの不安や恐怖の軽減を試みたり、ソーシャルスキルを修得させたり、さらにはこれからの生き方について心理教育をすることも子どもの自己決定を促進する源となる。ただ、今回の事例ではやはり父親の父性の発動が子どもを現実と直面させるための礎となったことと言うまでもない。

## 参考・引用文献

- Baker, H. (1990). *The management of school phobia*. in Rajinder, M. Gupta, R. M. (ed): Intervention with children.
- Barrett, C. L. (1969). Systematic desensitization versus implosive therapy. *Journal of Abnormal Psychology* 74, 587-592.
- Berecz, J. M. (1968). Phobias of childhood: Etiology and treatment. *Psychological Bulletin* 70, 694-720.
- Berg, I. (1970). A follow-up study of school phobic adolescents admitted to an inpatient unit. *Journal of Child Psychology and Psychiatry* 11, 37-47.
- Berg, I., Butler, A. and Hall, G. (1976). The outcome of adolescent school phobia. *British Journal of Psychiatry* 128, 80-85.
- Blagg, N. R. (1987). *School phobia and its treatment*. New York: Croom Helm.
- Cautela, J. R. (1968). Behaviour therapy and the need for behavioural assessment. *Psychotherapy: Theory, Research and Practice* 5, 3, 175-179.
- Eisenberg, L. (1958). School phobia: A study of the communication of anxiety. *American Journal of Psychiatry* , 114, 712-718.
- Estes, H. R., Haylett, C. H. and Johnson, A. M. (1956). Separation Anxiety. *American Journal of Psychotherapy* , 10, 682-695.
- Esveldt-Dawson, K., Wisner, K. L., Unis, A. S., Matson, J. L., & Kazdin, A. E. (1982). Treatment of phobias in a hospitalized child. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 13, 77-83.
- Eysenck, H. J. (1952). The effects of psychotherapy. *Journal of Consulting Psychology*, 16, 319-327.
- Eysenck, H. J. (1961). The effects of psychotherapy. In H. J. Eysenck (Ed.) *Handbook of abnormal psychology*. New York: Basic Books, 1961.
- Eysenck, H. J. (Ed.). (1960). *Behaviour therapy and the neuroses*. New York: Pergamon Press.
- Ferster, C. B. (1960). Positive reinforcement and behavioral deficits in autistic children. *Child development*, 1960, 32, 437-456.
- Forehand, R. (1979). Parent behavioural training to modify child noncompliance: treatment generalization across time and from home to school. *Behavior Modification*, 3, 3-25.
- Framrose, R. (1978). Outpatient treatment of severe school phobia. *Journal of Adolescence*, 1, 353-361.
- 藤岡孝志 不登校臨床の心理学. 誠信書房. 2005.
- Garvey, W. P. and Hergrenes, J. R. (1966). Desensitization techniques in the treatment of school phobia. *American Journal of Orthopsychiatry* , 36, 147-152.
- Heyne, D. and King, N. J. (2005). Treatment of school refusal. In Barrett, P. M. & Ollendick, T. H. *Interventions that work with children and adolescents: Prevention and treatment* (Chapter 11; pp. 243-272). John Wiley & Son Ltd.
- Homme, L. (1966). Human motivation and the environment. *The Learning Environment: Relationship to Behavior Modification and Implications for Special Education* (Edited by Haring, N., and Whelan, R.), University of Kansas Press, Lawrence, Kansas.
- Hsia, H. (1984). Structural and strategic approach to school phobia/school refusal. *Psychology in the Schools*, 21, 360-367.
- 河合伊六 1991 登校拒否 再登校の指導. ナカニシヤ出版.
- Kennedy, W. A. (1965). School phobia: rapid treatment of fifty cases. *Journal of Abnormal Psychology* 70, 285-289.
- King, G. F., Merrell, D., Lovinger, E. and Denny, M. (1957). Operant motor behavior in acute schizophrenics. *Journal of Personality* , 7, 25, 317-326.
- Klein, E. (1945). The reluctance to go to school. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 1, 263-279.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2003 中1不登校生徒調査 (中間報告) - 不登校の未然防止に取り組むために - .
- Lazarus, A. A., Davidson, G. C. and Polefka, D. A. (1965). Classical and operant factors in the treatment of a school phobia. *Journal of Abnormal Psychology* , 70, 225-229.
- Levis, D. J. (1967). Implosive therapy II. The subhuman analogue, the strategy and the technique. In S. G. Armitage (Ed.), *Behaviour modification techniques in the treatment of emotional disorders*. Battle Creek.
- Malmquist, C. P. (1965). School phobia: a problem in family neurosis. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 4, 239-319.
- Miller, L. C., Barrett, C. L., Hampe, E. and Noble, N. H. (1965). Comparison of reciprocal inhibition, psychotherapy, and waiting list control for phobic children. *Journal of Abnormal Psychology* , 79, 269-279.
- 文部省 1983 生徒の健全育成をめぐる諸問題-登校拒否問題を中心に. 文部省生徒指導資料第18集, 中学校・高等学校編.
- 文部省 1992 登校拒否 (不登校) 問題について. 文部省・学校不適応対策協力者会議.
- 文部科学省 1990-2010 学校基本調査速報・不登校, 内外教育. 時事通信社.
- Patterson, G. R. (1965). A learning theory approach to the treatment of the school phobic child. *Case Studies in Behavior Modification* (Edited by Ullman, L. P. and Krasner, L.), 279-285.
- Rajinder M. Gupta et al. (1990). *Intervention with children*. Routledge. 1990

- 齋藤万比古 2006 不登校の児童・思春期精神医学. 金剛出版.
- 佐藤修策 1996 登校拒否ノート. 北大路書房.
- Skytner, A. C. (1974). School phobia: A reappraisal. *British Journal of Medical Psychology* 47, 1-16.
- Smith, R. E. and Shape, T. M. (1970). Treatment of a school phobia with implosive therapy. *Journal of Consulting Clinical Psychology*, 32, 239-243.
- Stampfl, T. G. (1968). Implosive therapy: A behavioral therapy? *Behaviour Research and Therapy*, 6, 31-36.
- Tambirajah, K. J., Grandison, K. J. and Hayes, L. (2008). *Understanding school refusal*. London and Philadelphia: Jessica Kingsley Publishers.
- 寺田道夫 2005 不登校への対処～学校における早期対処のあり方 東海女子大学紀要第 25 号 79-94.
- 寺田道夫 2006 不登校児への対処Ⅱ～心理力動的接近～ 東海女子大学紀要第 26 号 135-189.
- 寺田道夫 2008 不登校への対処Ⅴ ～ Johnson et al., (1941) から私たちへの示唆～ 東海学院大学紀要第 2 号 133-148.
- 寺田道夫 2009 不登校への対処Ⅶ ～不登校問題史の研究の夜明け～ 東海学院大学紀要第 3 号 135-150.
- 寺田道夫 2012 不登校の子どもの理解と早期対処 5 一摸索期の心理的力動のアセスメントと対処の効果の検討—日本心理臨床学会第 31 回大会論文集, 48.
- Vaal, J. J. (1973). Applying contingency contracting to a school phobic: a case study. *Journal of Behaviour Therapy & Exp. Psychiatry*. 4, 371-373.
- Valles, E., & Oddy, M. (1984). The influence of a return to school on the long-term adjustment of school refusers, *Journal of Adolescence*, 7, 35-44.
- 横湯園子 1988 不登校の子どもの夏休みを考える 児童心理 7, 63-66 金子書房.
- 吉村英雄 1988 登校拒否の経過モデル 教育心理. 7 日本文化科学社
- Yule, W. (1979). Behavioral approaches to the treatment and prevention of school refusal. *Behavioral Analysis & Modification*, 3(1), 55-68.
- Waldfogel, S., Teeman, E. and Hahn, P. B. (1959). A program for early intervention in school phobia. *American Journal of Orthopsychiatry*, 29, 754-780.
- Warren, W. (1948). Acute neurotic breakdown in children with refusal to go to school. *Archives of the Disturbed Child*, 23, 266-272.
- Weiss, M., & Burke, G. B. (1967). A five-ten year follow-up of hospitalized school phobic children and adolescents. *American Journal of Orthopsychiatry*, 37.
- Wolpe, J. (1958). *Psychotherapy by Reciprocal inhibition*. Stanford: Stanford University Press, Stanford.
- Wolpe, J. (1961). The systematic desensitization treatment of neuroses. *Journal of Nervous and Mental Disease* 132, 189-203.